新刊紹介

For some in ancient books delight;
Others prefer what moderns write:
Now I should be extremely loth
Not to be thought expert in both.

『露店市・縁日市』

秦　孝治郎著

（白川書院、A5判　二六二頁、二、三〇〇円）

書物のなかに故人の俤をしのぶことはそぞろはかない思いをつのらせられるものであるが、しかし、故人を泉下に呼び起こすとまではいかなくても、故人の風貌に接する思いはなんと余韻嫋嫋の思いを胸にひたしてくれることか。

故秦理事長に露店市・縁日市の研究があったことは、その逝去後まもなく新聞紙上に報ぜられ、あの繁忙、困難な仕事の合い間に人知れず推敲した原稿のことを、感動にも似た思いで読んだ記憶はなお鮮烈な印象として残っている。

故秦理事長のこの方面の研究の一部は、はやく大正十三年五・六月、前後十三回にわたって、「郷土の経済・日曜市」と題して高知の『土陽新聞』に掲載された。ご遺族のかたからの話によれば、毎日曜日教会への道すがらの見聞に端を発して、この「日曜市」は成稿されたといわれる。尓来転石を斜面にころがすように戦争への道をたどった一九三〇・四〇年代、そして敗戦とその混乱、戦後の高度成長の進む社会のなかで、故秦理事長は劇務のかたわら、その視点が一貫して次の点に注がれていたことは生前の秦理事長の同志社におけるイメージと重ね合わせて、瞠目する思いである。それは、その稜々とした気骨であり、かつ、その滋味あふれる人間性にある。

周知のように、故理事長は、同志社が専門学校令による大学を称した当時の第一回の政治・経済学部の卒業生であり、尓来久原鉱業、朝日スレート、ついで日昌硝子工業株式会社という企業畑でその経営にたずさわった方である。その経営家の生涯を巨視的に日本のサイクルの中でながめると、第一次世界大戦直後の好景気から関東大震災を境とする慢性的不況、そして恐慌、戦時統制経済、敗戦の混乱、戦後の急速な経済成長という、まことに起伏転変のはげしい社会の中に過ごされたわけで、その間、故理事長の視点は常に巨大資本や厳しい経済統制の機構の下にあって、零細な資本をもとに営まれる底辺の商業活動に注がれていた。現実には巨大な国家統制のメカニズムの中に収められてしまう芥子粒のような資本ではあっても、そして踏みくだかれ、小さな天地に蹐躇する営みではあっても、なおかつ営々と続けられてきた庶民とその喜憂利害を共にする露店商人や市を担う民衆の経済行為が最も大きな関心領域であり、研究課題であったことが知られる。この視角は決して単なる余業や余暇のなかから続けられ、生まれてくるものではない、必ずや故理事長が心に刻みこんだ稜々とした反骨と愛の「哲学」にもとづくとしなければならない。昭和十二年、当時「日支事変酣

なる秋」という時期に、あえて露店に「大衆経済史の枢軸」を考え、そこにおける営みに「人間性を基盤とした取引形態」を見つけだしていることはなみなみならぬ気骨というべきであろう。その気骨から彫刻された作品は、専門の学術的な研究領域のなかでの論議を越えた、「人間」に視点をすえる玩味を求めてやまない。

それは「主流からはなれた」人々への愛情であり、露店で物を求める人の姿に感じられる「独特の味わい」を、自らも共存させていることであり、〝あわただしい生活は二十世紀の不幸の一つだ〟と思う現代文明批判の姿勢であり、「飾り立てた商品よりは、土壌の付着したままの生のものにひきつけられる」という人間生活の「純情朴訥」さと、そこに「気品と味わい」を求める姿勢である。

故秦理事長は謙遜して、「寝ころんで読んでも面白く」と、予定した「はしがき」で述べているが、本書はそんな安易な気持ちでは迫ることを許さない。生前の理事長に接したことのあるかたがたに、故理事長の姿を再びかみしめて思う偲び草として本書をお勧めしたい。また広くこの気骨の彫刻を広く世の人にもお勧めしたい。

末になったが、上梓に当たっての坂本武人氏の労を謝するものである。

（杉井六郎・大学人文科学研究所専任研究員）

杉井　六郎著

『徳富蘇峰の研究』

（法政大学出版局、A5判、四三二頁、四、八〇〇円）

私は、かつて明治二〇年代の政治運動を地方名望家層を中心に分析した際、彼ら名望家層の行動原理が多くの場合徳富蘇峰の「平民主義」を基礎にしていることを意識したことがある。蘇峰の書く文章は平易にして明解、かつ躍動に富んでいる。多くの人がそれに魅了されたとしても不思議はない。明治一〇年代後半から明治期にかけて蘇峰の思想的影響力はかくも甚大であった。植木枝盛、中江兆民などは、影響力という点では蘇峰に遠く及ばない。おそらく福沢諭吉と並ぶ存在であろう。

これまで、日本近代思想界の一巨人、蘇峰については多くの研究がある。それらの諸研究と、ここで紹介する杉井氏の労作との違いは何か。ひとことでいえば、従来の研究が、「国民之友」の論説や、「将来の日本」、「新日本之青年」、「吉田松陰」などの主要著作をもとに蘇峰論を構成したのに対し、杉井氏の場合、蘇峰に関する可能なかぎりの史料をどんよくに渉猟し、その上で一思想家に内在する西欧近代文明と在来文化との相剋を実体的に把握したことである。氏が、日本国内のみならず、アメリカ、ソ連の史料を渉猟し、それを駆使していく姿勢には驚くものがある。とりわけ、「第六章　蘇峰の欧米旅行」は、従来全く研究が欠如していた問題であり、圧巻である。また、氏は、一つの史料に対して詳細克明に検討を加える。たとえば、第一章には「奉教趣意書」署名の分析、第二章には新島襄の第二公会設立、はじめての受洗者に関する記録の分析があるが、この克明な分析を通して、前者からは、蘇峰の「伝統」に対する姿勢と「近代」に向かう姿勢の交錯が、後者からは、受洗当時の蘇峰のキリ

スト教信仰の純粋さがみちびかれる。後者は、『蘇峰自伝』の表面的な理解からは想起しえない点である。

『蘇峰自伝』から想起できない氏の指摘は他にもある。三国干渉後の急激な「転向」の問題である。氏は、第五章で蘇峰の中国観の推移をたどり、彼の膨張論が「急激」なものではなく、潜在性から顕在性へと推移、展開していったことを跡づける。説得的である。

さらに特筆しなければならないのは、蘇峰における新島の存在の大きさの指摘である。筆者の乏しい私見の範囲内では、「第二維新」を唱える蘇峰が、自己と吉田松陰をオーバーラップさせていた、という指摘は、従来されていたが、氏のように、蘇峰が松陰像と新島像を交錯させていた、という指摘はなかった。同志社人たる氏であればこそ、なしうる鋭い洞察であろう。

かつて鹿野政直氏は、人文科学研究所キリスト教社会問題研究会をして、「蘇峰研究のメッカ」と称した。本書が「メッカ」たる位置にふさわしいものであることはいうまでもなかろう。大著であり、決して読みやすいとはいえないが、一読をこうしだいである。

（高久嶺之介・大学人文科学研究所専任研究員）

荻野恕三郎著『生甲斐無用の論』

（南窓社、B6判、二三八頁、一、七〇〇円）

本書は、もと「生甲斐の構造と批判」という題名で数年前出版されたものである。ちょうど生きがい論がブームのころで、この方面の本がかなり店頭に見受けられたが、本書はそれらの群書とはおよそ類を異にするものであった。それは、まず第一に、本書が生きがいのあらゆる場合をくまなく取り上げ、しかもその一つ一つに徹底的な検討を加えていること、第二に、生きがい論を、単に今日という時代のいわば時事的問題にとどめず、むしろ、時代を超えた人間そのものの問題として、これに取り組んでいることである。特に、後者のような問題の受け止め方によって、前者の網羅的、徹底的な生きがい論批判が、さらにすすんでそれの構造的な批判にまでなっていることである。この領域は、もはや著者の哲学的思索の独壇場の感が深く、単なる評論的思考の遠く及ばないところである。

ところで、ひるがえって考えると、一般に批判というものは何か基準となるものがなければ不可能である。批判はつねにそういう基準にもとづいておこなわれるからである。「生甲斐の構造と批判」の本でも、無論、そういう批判の基準となるもの（著者の立場）は確固としてあった。ただ、そこではそれはまだ暗黙に前提されるにとどまっていたのである。そのため、読者はそもそも何のためにこのような生きがい論の批判と否定がなされなければならないのか、その意図をじゅうぶんくみ取りかねるうらみがあった。今度の「生甲斐無用の論」では、その意図を明らかにするため、暗黙の前提となっていた著者の立場そのものをより明瞭にしたのである。そしてこの点こそ、他に類例を見ない本書の最大の特色といえるかもしれない。

では、著者の立場とは何か。ひとことで

いえば、それは遊びの世界である。著者のいう遊びの世界は、荘子の思想を手がかりにして縦横に論じられ、簡単に要約することを許さないが、とにかく人生に何一つとしてむだなことも無意味なこともない、いっさいのものに意味のみちみちた、豊かな世界である。ところがそれに反し、かの生きがい論はいずれも、仕事・家庭・愛・未来・希望・理想・目的・自己実現といった人生の一部分にすぎない何ものかに特別の価値をおき、それによって人生全体を意味づけようとする立場に立っている。そこでは当然、人生の一部分のものが価値ありとして追求される反面、他の大部分のものは無価値のものとして切りすてられることになる。それは豊かな人生をわざわざ貧しいものにすること以外の何ものでもない。かくて遊びの世界から見れば、いかなる生きがい論も無用なことは明らかである。本書はこのあたりの論理を、配慮の行き届いた平明な論述によって、読者にじゅうぶん納得させてくれるであろう。

（寺岡弘雄・大学文学部嘱託講師）

明治中期の同志社校地

この号の扉の略図は、明治二十七年ごろの同志社校地である。約三万五千坪あり、現在の今出川校地の面積にほぼ匹敵する。これ以外に、一万三千余坪の土地を所有していたようである。

新島襄は校地の拡張にはずいぶん力を注いだらしい。御所の周辺に売地があると、かなりむりをしても購入につとめたようだ。あまり知られていない新島の一面である。

現在の私学会館の北隣あたりに同志社病院と看病婦学校があり、今出川校地にはハリス理科学校、政法学校などがみえ、女子部もひろびろとしている。左端は現在の寺町鞍馬口のあたりで、これは大学用地として大沢善助が買った彦根屋敷跡である。

今出川校地の中には、新北小路通りと石橋通りが東西に抜けていて、主要な建物は石橋通りの北側に並んでいる。このあたりが、山本覚馬が所有していた薩摩屋敷跡であろう。建物の裏手はすぐ相国寺境内に接していて、現在の中学グラウンドは松林だったようだ。烏丸通りは上立売通りまでしか通じていなかったようで、道幅も狭かった。現在の大学会館あたりには尋常中学校があった。なお、新島邸とその敷地約千坪が未亡人から同志社へ寄付されたのは、明治四十年十一月である。

この校地図が『同志社報告』に掲げられた直後、すなわち明治三十年代に、社会的にも「国粋保存の議論が勢力を占めるやうになり」（原田助）、新島亡き同志社は存続さえ危ぶまれるような危機に直面する。看病婦学校や病院は理事佐伯理一郎の名義になり、理科学校、政法学校は閉校のやむなきにいたった。

だが、校地が売却されるのは明治四十二年以降で、専門学校令による大学開設の基金をえるためであった。多くの宣教師館は、岩倉土地購入にともなって処分された。昭和二年のことである。

略図が、校地の今昔をしのぶよすがともなればさいわいである。

（河野仁昭・社史史料編集所主任）